

「あいさつ」

昭和館は戦中・戦後の国民が経験した生活上の労苦を後世代の人びとに伝えることを目的に、平成十一年三月に開館した国立の施設です。開館以来、平成二十四年十二月末までに延べ三四〇万人を超える方々に来館していただき、常設展示や特別企画展を見学し、映像・音響室や図書室、昭和館懐かしのニュースシアターなどを利用していただいております。

さて、平成十四年に刊行を始めた本誌『昭和のくらし研究』も今回第十一号を刊行する運びとなりました。

本年は戦後六十八年を迎えますが、今から七十年前の昭和十八年、日本は戦争の真つ只中にありました。本土では来たるべく空襲に備えて、都市民の地方への疎開とともに、建物疎開が大きな問題になっていました。空襲による延焼などの被害を少なくするために、あらかじめ建物を強制的に壊し、空地にしておく建物疎開が準備され実施されたのです。本誌では初めて特集として「建物疎開」を企画し、神奈川県下の建物疎開を検討した中根賢氏に執筆をお願いしました。また、昭和館収蔵資料の中から「家屋改造助成」のポスターなど関連する実物資料と、『帝都に於ける建物疎開の概要』の資料紹介を掲載することとしました。

伊勢弘志氏には戦時体制下の学校教育における音楽教育の役割を社会、国家からの要請という視点から検討した論文の執筆をお願いしました。取り上げられた楽曲などの音源について、昭和館が収蔵するSPレコードのレーベルを口絵で紹介し、併せて参照できるように編集しました。

さらに昭和館が平成二十五年三月十六日(土)から五月十二日(月)まで開催する特別企画展「生誕一〇〇周年、没後三〇周年記念 中原淳一の生きた戦中・戦後 く少女像にこめた夢と憧れ」に関連した、当館学芸員による論稿も収録しました。服は家庭で作ることが当たり前とされた時代、中原淳一がデザインした洋服を実際に作る過程と様子を再現した興味深い内容になっています。

執筆者には短い準備期間ながらも、玉稿をいただくことができ、改めて感謝いたします。

これらの成果は展示や資料の公開など昭和館の活動に反映させ、来館者の期待に応えていきたいと考えております。今後も戦中・戦後における国民生活上の苦難の様子を後世代に伝えるために努めていく所存でありますので、一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成二十五年三月

昭和館 館長 羽田信吾